

大永六年（一五二六）五月、内房の海を内陸へ帆を張る船団があった。二つ引両の紋を鮮やかに染め抜いた、里見の水軍である。

この船団の旗船に乗るのは、正木大膳大夫通綱。

この船団の進軍目的は、北条氏の港湾拠点のひとつ品河湊の襲撃である。

里見氏はこの時点で正式に北条氏と手切れを宣言していない。

「ゆえに奇襲には申し分ない」

という真里谷信保の申し入れに、里見義豊が応じたのだ。

「海賊衆で奇襲するのがいちばん迅速でよい。

しかもいざとなれば、海上へ逃げればよいから兵は損なわれ難い」

この総指揮を正木通綱に命じた義豊の言葉は、これまでと異なる的確なもので、奉行衆は怪訝そうに顔を見合わせた。「一統」を胸中に秘めるこれまでの義豊には、ありえないことだった。

「それはそれで、有為な一戦に違はないのだ」細かい作戦内容については、事前に里見実堯と固めていった。正木通綱にとつて、義通亡きいま、実堯がもつとも心強い存在だった。

出航後、程なくして真里谷の水軍が与力として加わった。が、大した数ではない。船団は木更津沖で進路を変えて、品河を目指した。

左手に六郷の河口を見ながら、やがて視認できる品河湊の蔵に向けて、正木通綱は火矢を構えた。

風は海から陸に吹いている。格好の条件だ。湊には荷下ろしの舟が数隻、戦さの舟はない。

「よし、放て」

火矢は南風に乗る、雨の如く蔵に降り注いだ。茅葺きの雨露凌ぐ程度の蔵は、みるみると炎に包まれていった。

里見の兵たちは穀倉の略奪のため、脱兎の如く舟から飛び出していった。

「みんな焼くことはない。まずは食い物を奪い取れ。刃向かう者は切り捨てよ、それ以外は捨て置け」

正木通綱は略奪の二割を海賊衆に与えると言っていたから、彼らは大いに励んだ。遅れてなるものかと、真里谷勢も飛び出したが、二割の恩賞という沙汰は大きい。

多く搾取すれば、それだけ実入りがあるから、海賊衆は必死だ。真里谷勢は気圧されて、略奪も儘ならない。

「北条の兵だ！」

帆柱から遠目に見ていた番兵は、日比谷入江から小舟で繰り出してくる敵兵を発見して叫んだ。

「小舟の兵は先兵、いずれ本隊がくるぞ。搾取はここまで、皆は随所に火を放ち、急いで舟に戻るべし」

正木通綱の沙汰は一糸乱れることなく遂行された。この間におこぼれを急ぐ真里谷兵は、炎に捲かれて逃げ遅れた。繰り出してくる小舟には三人の兵と漕ぎ手、それが一五隻で連なってきた。風向きは追い風になっている。

「よし、弓を馳走してやるがよい」

里見勢は矢を見舞い、それらは風に勢いを増して小舟へ鋭く突き刺さった。応酬する暇も与えずに、船団は回頭を始めた。そして湾の沖へと奔り出したのである。

品河湊海戦により、里見氏は北条氏と完全に手切れとなった。むしろ手切れになることは、小弓公方との決裂により、北条氏綱も想定していたことだろう。ただ、品河攻撃は、完全な奇襲となつて、里見勢に軍配を上げた。

造海城に帰港した水軍を、里見実堯が出迎えた。予想以上の収穫に満足した実堯は

「これは働きに応じた手柄。海賊衆に略奪の品の三割を与える。その代わり、残りはず久里川の湊まで廻送しておくれ」

その報酬に海賊衆は歓声を上げた。

「よいのですか？」

正木通綱が訊ねると

「構わん。これほどの成果を上げたからには、少し喜ばせてやっても罰はあたるまい」

「いかにも」

「ただし、殿には内緒にしてくれよ」

そういつて、実堯は笑った。水軍が品河で行

動中、里見実堯は烏山弾正時貞に

「白浜にて殿はいかがなされたか」

と問い質した。白浜に近侍していた烏山時貞は
首を傾げながら

「杖珠院で御本尊に手を合わせながら、何事か
を考えていた由にて、委細は存じませぬ」

と答えた。

十
十
十

新たなる敵(4)

夢酔 藤山